広報 市民リポーター だより No. 1

今月から毎月1日号で、8年度の広報市民リポーター（6人）の取材によるリポートを紹介します。

広報おおだてを通じて

小林 りつ子さん

（二井田・小坪川原）

初めて市民リポーターになり、市政にはほとんど無関心だった私も、周囲に少し気を配るようになった。そんなとき、毎月私たちに配布されている広報と違う点字用の「広報おおだて」を目にし「市民のために、こんな細かい配慮もされていたのか！」と胸が熱くなった。〝お役所仕事〟正直言って事務的で何か冷たい響きさえ感じていたが、このことが、中身を知らないで評価してはいけないと、イメージが一変した。

私の第一回の取材は、もっと奥が深そうな「広報おおだて」に決めた。担当しているのは、広報広聴係の小笠原係長、花田さん、工藤さんの行動派三人。「取材するのは慣れているけれど、取材されるのは初めて」と係長が頭をかきながら話してくれた。

広報づくり

広報が創刊されたのは、昭和二十六年八月、新聞紙半分の大きさで、少し変色していた。市政と市民のパイプ役になろうと熱意をもってペンを握ったであろう当時の担当者の思いが伝わってくるようだった。そして、昭和四十八年四月から現在のサイズとなった。

現在、表紙は「市民の顔」と決めており、昨年は、行事をテーマにし、今年は、四季の農作業を少しでも多く載せたいそうだ。内容で一番心がけていることは「市民がいま何を求め、知りたがっているか」ということである。トップ記事には、それが詳しく、かつわかりやすく説明できるように各課に広報主任を置いた。

編集会議には、三人がそれぞれの案を持ち寄って臨み、良いものから抜粋して割り付けていく。納得がいかないことや意見がかみ合わないときは、とことん話し合うという。三人のチームワークは最高だそうだ。会議が終われば、即仕事に取りかかるという。前もって原稿や取材依頼の済んでいるものはいいが、コーナーによっては公募が少ない場合もあり、足で捜すこともあるそうだ。そんな担当者に力強い見方、軽ワゴン車が仲間入りした。これからは、市民の声をもっと聞きに走り回りたいと、はりきっていた。

広報係長から取材している小林リポーター

机の上は、取材した原稿用紙が山積みされているのかと思ったら、なんと今はワープロを使っていると聞いて、時代の流れを感じた。まだまだたくさんの行程が残っているが、こうして月二回（一日号、十六日号）の広報は発行される。私が目にした「点字広報」のほか「声の広報」というものもあるそうで、ボランティアグループ「麦の会」のかたたちが毎回テープに吹き込んでくれるそうだ。ありがたい。

リポーターになったが、文章を書くのが苦手という私に「文章も料理と同じ。たくさんある材料をどんな手順で料理するか考えればいい」とアドバイスしてくれた。「猿も木から落ちる」で、ベテランの係長もちょこちょこミスをするそうだ。「苦情の電話が殺到したりするが、そんなとき二度と間違えないと思う反面、多くの市民が広報を読んでくれているのだ、期待に応えなければ」と実感するそうだ。担当者はほかの市町村と広報の情報交換したり、研修会で常に腕を磨いているようだが、なんといっても私たち市民の感想、意見、アドバイスなどが一番うれしいのではないかと思った。

広報広聴係の仕事

広報ばかりが仕事ではない。それに並行させて市勢要覧の作成、テレホンサービスの原稿づくり、ホット・アイあきたへの情報提供、市民と語る会の開催、ふるさと探検号の企画など、よく三人でこれだけの仕事がまかなえるものだと関心した。ふるさと探検号は、毎回すごい人気だそうで、参加した人の多くは「大館は何もないところだと思っていたが、人に誇れるものがたくさんあるんだね」と再発見するそうだ。

リポートを終えて、取材したのは市政のほんの一部にしか過ぎないが、私たち市民のためにたくさんのことをしてくれているのだと実感した。これからは受け身だけではなく、参画できる女性になろうと思わせてくれた貴重な体験だった。